



# 施設だより

## ひこね市文化プラザ

☎26-8601 FAX 26-8602  
12月の休館日:3月・10月・17月・  
25火・29土～31月  
※年始は、1月4日金から開館します。

12月2日(日) 14:30～  
**人形劇回京芸「潜水海賊キャプテン・グック」**  
会場 みずほ文化センター・ホール  
自由 シングル券 1,200円(当日1,500円)  
ペア券 2,000円(当日2,500円)  
【好評発売中】

12月12日(水) 18:30～  
**劇団四季ミュージカル「エビータ」**  
指定 S席8,400円、A席6,300円、B席5,250円  
【好評発売中】

12月16日(日) 14:00～  
**第10回記念 ひこね市民手づくり第九演奏会**  
指揮者 松尾葉子  
自由 1,500円(当日2,000円) 【好評発売中】

12月22日(土) 13:30～  
**お楽しみコンサート「クリスマス」**  
☆クリスマスの曲がいっぱいにつまったコンサート。  
心地よい音楽とお話をお届けします。  
☆小山陽子さん(フルート)、大八木慶子さん(オーボエ)  
西村光世さん(ピアノ)  
【鑑賞無料】

1月27日(日) 14:00～  
**オペラ物知り講座 in ひこね**  
ーモーツァルト魔笛ー  
☆観客席から見ただけでは分からない、オペラの成り立ちや秘密を、生の演奏とさまざまなエピソードや解説を織り込みながら、ハイライトで楽しむ講座です。  
自由 1,500円(当日2,000円) 【好評発売中】

2月11日(月祝) 17:00～  
**小椋佳「歌談の会」**  
指定 1階席4,500円、2階席3,500円  
【12月15日(土)発売開始】  
※窓口販売 9:00～、電話予約 11:00～

3月20日(木祝) 15:00～  
**エコメモリアル・チェンバー  
オーケストラ 演奏会**  
自由 大人2,000円 18歳以下1,000円  
(当日:各500円増)  
【12月16日(日)発売開始】

マーク: 託児サービスがあります。(要予約)  
※公演日の1週間前までにご予約ください。  
マーク: 公演終了後、彦根駅行き・南彦根駅行きの臨時バスの便があります。

チケットのお申し込み、お問い合わせは  
チケットセンター ☎27-5200 (9:00～19:00)

## 年末年始休館のお知らせ

ひこね市文化プラザ/彦根市民体育センター

12月29日(土)～1月3日(木)

上記のとおり年末年始休館とさせていただきます。

## 彦根城博物館

☎22-6100 FAX 22-6520  
12月の休館日:25日火～同31日月、  
※22日(土)～同24日(月)は展示替えのため、展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30～17:00(入館は16:30まで)

### ～12月22日(土) 「大名の調度-暮らしを彩る-」

婚礼調度をはじめ、さまざまな場面を彩っていた各種の調度品。雅びな大名の生活に思いをはせます。



▲黒漆塗笹唐草蒔絵基盤

ギャラリートーク  
「大名の調度-暮らしを彩る-」  
12月1日(土) 14:00～15:00  
解説:本館学芸員 小井川 理(こいかわ り)  
※事前申し込みは不要です。当日館内講堂にお集まりください。  
観覧料が必要です

### 1月1日(火祝)～2月5日(火) 「多賀大社の名宝」

「延命長寿の神さま」として、篤い信仰が寄せられてきた多賀大社。その社宝の中から、優れた美術工芸品の数々を展示します。



▲調馬・厩馬図(重要文化財・多賀大社蔵)

ギャラリートーク  
「多賀大社の名宝」  
1月12日(土) 14:00～15:00  
解説:本館学芸員 坪内 広子(つぼうち ひろこ)  
※事前申し込みは不要です。当日館内講堂にお集まりください。  
観覧料が必要です

### ほんのりの出会 ー常設展示の名品ー

譜代大名筆頭・井伊家に伝来した大名道具を中心に、日本の美と歴史にせまります。  
「武器・武具」「能面・能装束」「茶道具」「湖東焼」「雅楽器」「調度」「絵画」「古文書」などの名品・逸品が次々と登場します。

### ～12月22日(土) 橘紋蜀江文蒔絵鞍

錦の文様である蜀江文を、蒔絵と金具であらわした、デザイン性に富んだ鞍。



### 小面 井関家重作

初々しい印象を与える、高貴な若い女性の面。江戸時代初期の名工、家重の作。

テ  
ー  
マ  
展

常  
設  
展  
の  
名  
品

# とまの玉手箱

博物館からのメッセージ



第136回

## 日本古来の楽器——和琴——



▲琴(銘敷島)  
右は、渦状の木目が見られる同部分

現代ほど、気軽に音楽を楽しめる時代はかつてありませんでした。1877年に、エジソンが初めて録音に成功するまで、音は、その場限りで消え去ってしまつたものでした。このことを、今様という流行歌の名手であった後白河天皇(1127～1192)は、自ら編さんした歌謡集『梁塵秘抄』の中で、「声技の悲しいことは、私が死んでしまったのちに留まることのないことだ」と嘆きました。また後白河は、音楽の本質について、「神社に参つて今様を謡つたところ、神の示現を被ることが度々であった」とも語っています。音楽は、人間ばかりでなく、神々の心をも動かす、不思議な力を秘めているというのです。

日本人は、音や声が、この世の領域を越えて聖なる世界や異界に通ずると考えていました。弥生古墳時代の遺跡から出土する木製のコトは、日常の楽しみのためではなく、祭祀や葬送儀礼に使われたとされています。このコトの系譜を引くのが雅楽の神楽や東遊、久米楽などに使われる和琴です。

和琴は、長さ約190cmで、6本の絃を張ってあります。装飾を一切施さず、琴柱は楓の枝の二股になつた部分を切り取って使います。自然の素材を生かした、いたって簡素なつくりですが、雅楽の楽器のなかで、このほか重視されてきました。『源氏物語』の常夏の巻には、「外国のことは知らず、わが国では和琴を楽器の第一としてしているようだ」とあります。なぜ和琴なのか。それは、遙か古の神代から伝えられた日本古来の楽器であると認識されていたからにほかなりません。6張りの弓を並べて弦をかき鳴らしたのが起源だとする伝説もありました。鎌倉時代の歌人藤原為家の和歌に

和琴(銘敷島)は、常設展示で、12月21日(金)まで展示しています。